

イースターメッセージ

復活？

秋葉晴彦（日本聖公会北関東教区司祭）

教会の屋根の上の十字架を見て『あそこに行けば話を聞いてもらえる』と、教会の扉を叩く人たちがいるのをご存じでしょうか。わたしの経験では、その多くが心の病を抱える方々でした。医者に話せば薬が増えてしまい、家族に話せば同じ話の繰り返しと言われ、誰にも話を聞いてもらえない。ある意味では人生の「袋小路」に追い込まれてしまった人たちが、十字架の前でふと立ち止まるのです。この人たちは十字架の弱さに共感できる人たちではないかと思うのです。

12月25日は何の日でしょうか。そうクリスマス。イエスの誕生日。わかりやすい。ではイースターは？ 「復活」のとき。では復活とはどのようなできごとだったのでしょうか？

聖書に4つある福音書のうち最古のものはマルコによる福音書だと考えられています。その復活の記述を見てみましょう。イエスは十字架にかけられ葬られます。そのイエスを求めて墓を訪れた婦人たちの前に若者が現れ、「あの方は復活なさって、ここにはおられない。」と語りました。

人のためであれば神から与えられた力を惜しみなく使い、自分のためにはその力を使わない。そのような生き方をイエスは弟子たちに伝えようとしていたのですが、この世の常識にどっぷり浸かっていた弟子たちにはそれが伝わりませんでした。

イエスの弟子たちが抱えていた欲望を一言で語ってしまえば「出世欲」ということになりましょう。そのような弟子たちを諭しながら、イエスは「救い主は死なねばならない」と十字架へとまっしぐらに歩みました。そのイエスでさえも、自分が十字架の上で死に追いやられることまでは考えてもみななかっただろうとわたしは思います。

どこかで神がこの事態を受け止めてくださるはずだと期待していた人々は、イエスが十字架というおぞましい処刑道具の上で絶叫しながら息絶えていった現場に立ち会いました。人生の「袋小路」に追い込まれながら絶命していくイエスの姿を見守る以外にすべを持たなかったのです。

そのイエスが復活したのです。聖書には「婦人たちは墓を出て逃げ去った。震え上がり正気を失っていた。そして、だれにも何も言わなかった。恐ろしかったからである。」とあります。大多数の現代人と同じく、当時の人々にも復活の意味がわかりませんでした。神の考えが理解できず逃げ出してしまったのです。

イエスは自分の力でこの世に「よみがえった」ではありません。「十字架」の前に立たされても逃げなかったイエスの様子を見た神が、イエスを「よみがえらせた」のです。「救い主は死なねばならない」という言葉通りに、自らの人生を「袋小路」に追い込んだイエスに、神から与えられた二回目の誕生日がイースターです。その日を祝って教会では「イースターおめでとう」と言葉を交わします。その言葉を聞く時、わたしは、十字架を見てそこに引きつけられる人たちの中に、十字架の本当の力を見るような気がするのです。